序

1200余年の昔、唐の長安を模して造られた平城京は、廃都の後その大部分が田園と化していたが、近年に至り急速に市街化が進みつつある。しかし平安京などとくらべ、なお旧態を存しているところが多く、市街化に先立ってその遺跡を究明するとともに、重要なものについては保存の対策が講ぜられねばならない。

当研究所平城宮跡発掘調査部においては、京内の数ヶ所についてすでに調査を行って来たが、昨昭和50年近畿郵政局の依頼にもとづき、奈良郵便局の移転計画用地である左京３条２坊６坪の発掘調査を担当した。

発掘調査は同坪の３分の１以上にわたって行われたが、その結果、当初予想もされなかった奈良時代の大規模な庭園遺構が発見されたのである。石組で固めた延長55ｍに及ぶ園池が、ほぼ完全な姿で遺されており、またこれと一体の形で、おおむね２期に区分される建物などの遺構が見出された。

あたかも東山を借景とする見事な庭園遺構で、園池の形や水の勾配などから曲水の宴が催されるにふさわしいものであり、また後期の建物は後の寝殿造の地割りに類似している。出土した木簡や瓦、そして建物の編年などから、奈良時代を通じて存続したものであることが明らかであり、また平城宮に関連した公的な庭園ではないかと推定される。

８世紀の庭園が、万葉集や懐風藻にうたわれた姿さながらに、このような完全な形であらわれ、その占地、地割、意匠、作庭技法などを細部まで知ることが出来るのは、日本庭園史上からも画期的なことであり、上代遺跡としてまことに貴重なものと言わねばならない。ここに取り急ぎ調査の概要について公刊する次第である。

今回の発見は、庁舎建設のための調査中にたまたま行われたものであり、今後も積極的な事前調査が行われる体制の必要を如実に示したものと言うべく、更に進んで京内の重要遺跡について組織的計画的な調査が行われることを望むや切なるものがある。

１９７６年３月

奈良国立文化財研究所長

小　川　修　三